

「学びに向かう力・人間性等」を育む授業づくり

～自ら課題設定をするために、新聞等を活用できる子の育成～
五泉市立愛宕小学校

1 学校の概要

旧村松東小学校と旧川内小学校の二校が統合し、創立九年目を迎える。白山や早出川などの自然環境と、農業と商業を中心として栄えた歴史と文化豊かな生活環境に恵まれた学区となっている。

「進んで学び鍛え助け合う子」を育むために、様々な場面で地域の素材や人材を活用して、地域に学び、地域とともに歩む教育活動の充実を図っている。

生活科では、1・2年生は町探検に出かけている。新潟大学農学部が経営する農場を訪問し、酪農の様子に触れたり、地域の商店街を訪ね、人と物の交流の工夫を調べたりして、地域のよさや温かさを学ぶ。

総合的な学習の時間では、3年生は地域の実話「忠犬タマ公」の伝承、4年生は早出川の水の環境、5年生は米作りを通した地産地消、6年生は村松の文化・歴史を中心テーマとして、児童一人一人が問題意識を高めている。自慢できることを調べるのにとどまらず、地域がより輝くための行動、発信する学習を進めている。

地域を誇り、地域を愛する「愛宕愛」を育む活動を大切にした教育を展開していく。

2 N I E実践のねらい

（1）研究主題とNIE実践の関連

本校の研究主題は、『「学びに向かう力・人間性等」を育む授業づくり～自ら課題設定をするために、新聞等を活用できる子の育成～（1年次）」である。子ども自らが課題設定できる姿をNIE実践のねらいと設定し、研究を行った。

NIE実践が、自ら課題設定ができる力の育成になぜ有効か、その根拠は以下の通りである。

土屋（2017）によるとNIEを通して育てたい「資質・能力」として、以下のよう

（中略）

③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

社会に関心をもち、社会の動きや社会で問題となっていることを自分自身の問題としてとらえ、よりよい社会の形成に参画・参加しようとする意識を育てることができる。

様々な意見や価値観を認め、協働して学ぶ姿勢を育てることができる。多くの事実や意見の中から、自らの判断で自分の意見・判断を練り上げ、調べ、解決することができる。

太字になっている箇所が、本校の目指す子どもの姿と合致する点である。つまり、新聞を用いることが、社会・自然への興味関心をもてるような環境となり、自分で課題を立てて学習に取り組む姿勢が育成されるのではないかと考える。

新聞活用を手段として実践することで、子どもが自ら課題設定する姿を達成できるかを検証する。本校で検証する新聞活用の場面は大きく2つである。その検証の方法は、2018 新潟県 NIE 実践報告書 vol.23 新潟市立和納小学校の実践を引用する。

新聞の活用方法の枠組

ア 新聞記事の中に問題がある。

新聞記事を紹介することで、子どもが疑問をもったり分からない部分が生じたりする。新聞記事をもとに学習課題がつくられる。

イ 新聞記事の中に考えるための手立てがある。

学習課題があって、それを解決するための糸口やきっかけ、考えるための素材を新聞記事から見出す。新聞記事を用いながら問題解決を図る。

ウ 新聞記事の中に答え（学習の確認、発展問題）がある。

学習を進めて得た解やまとめが、世の中とどのように結びついているかを確認したり考えたりするために、新聞記事を利用する。

1 つ目は、前時の終末場面である。上記のウを活用する。新聞記事で問題解決したことを通して、分かったことやさらに疑問に思ったことなど振り返りを行う。振り返った内容を生かし、次時で考えてみたい学習課題が生まれると考える。

2 つ目に、本時の導入場面である。上記のアを活用する。課題提示に新聞記事を用いる。疑問や不確定な部分が生じ、問題を解決するための学習課題が生まれると考える。

このように、新聞活用を単元全体で検討し、手立てとしてどのタイミングで新聞を生かすことが、子ども自ら課題設定できることに繋がるのかを明らかにする。

（２）新聞への意識改革

図1は、本校で調査した子ども・保護者を対象とした新聞に対する意識調査の結果である。グラフから分かるように、新聞に対して、家庭で新聞を読む環境が整っていない現状があることが分かる。

本校の職員に新聞に対する意識調査(口頭)においても、同様な結果であった。その理由として、昨今、情報を得る手段が多様化していることが挙げられる。「わざわざ新聞でなくても情報は得られる」が根底にあるようだ。

まず、この新聞への意識改革を1年次の大きな目標として、実践していく。子どもを取り巻く大人(保護者・教職員)が「新聞の良さ」を実感できれば、子どもにも新聞の有効性・有用性が伝わるのではないかと考える。

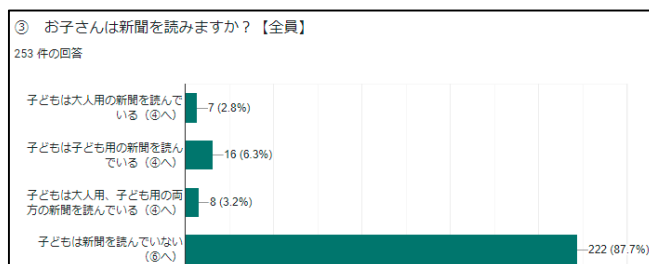


図1 保護者アンケート結果

3 本年度実践の概要

実践の概要は、以下の5つの実践を行った。

- ・授業場面での新聞活用
- ・職員終会での新聞紹介
- ・NIEスペースの設営
- ・子どものNIEタイム（朝学習）
- ・職員研修

（1）授業場面での新聞活用

一人2回の公開授業を行う。教科・領域の幅を徐々に広げられるようにする。1回目の公開授業では、NIE実践集を参考に、新聞を使った授業に教職員が手応えを感じることをねらう。2回目の公開授業では、1回目の公開授業の結果を踏まえて、教職員の創造性を加味して、指導案を作成し、実践を行う。その際に、課題設定の場面に重点を置く。

授業における新聞の位置付けについて、学習指導案に明記する。学習指導案の作成時や協議会時に「新聞は効果的に活用されたか」という視点を加える。

各学年部で提案された授業の概要である。

学年 1 学年

教科・単元名 音楽科「どれみと なかよくなろう」

授業の概要

本題材は、鍵盤ハーモニカの基本的な演奏の仕方を身に付けた上で、新聞を活用した旋律づくりの学習を行った。

まず、旋律づくりの面白さを感じられる活動に入る。新聞で、自分で見つけた「ど、れ、み、ふぁ、そ」の音だけを使って旋律をつくることのできることを全体で確認した。そして、児童は一人1枚配付された新聞紙から「ど、れ、み、ふぁ、そ」を見付け、自分だけの旋律を作りたいという意欲が高めた。

次に、様々な旋律があることを気付けるような学習に入った。自分だけの旋律で終わらず、友だちの旋律から様々な旋律があることを知り、自分の旋律を見直す姿が見られた。

新聞活用…本時の導入場面

成果

- 新聞紙から自分で見つけた「ど、れ、み、ふぁ、そ」には、自分だけの旋律を作ってみようという意欲を高めた。
- 新聞紙から得られる「ど、れ、み、ふぁ、そ」の数が、児童によって違うことで、できる旋律が多様になった。そのことが、様々な旋律があることに気付き学習内容に深まりを増すことに繋がった。



学年

4 学年

教科・単元名

道徳科「みんなが仲良く暮らしていくために～新型コロナウイルスから考えよう～」

授業の概要

授業の導入で、新潟日報のきらきらキラリ「感染者に偏見持たないで」という記事を児童に範読した。すると、児童は「怖い」「不安になる」「うっさいでほしい」などと話した。児童の言葉から『病気』『不安』『差別・偏見』がループ状になることをまとめた。

ここで、「差別や偏見をせずに、みんなが仲良く暮らしていくためにどうすればよいだろうか？」と課題設定を行った。

「新型コロナウイルス」を題材として、「仲良く暮らしていくために」の行動を考えることができた。最後に「差別をしている人」と「差別をされている人」に限定をして、自分の思いや考えを手紙に表した。



新聞活用…本時の導入場面

成果

○自分たちと年齢が近い中学生が書いた記事を読んだことで、自分事として差別や偏見を考えようとする姿が見られた。

○励ます手紙を書こうと思う児童もいた。自分にできる行動を手紙に表そうとしていた。

学年

5 学年

教科・単元名

道徳科「家族のために」

授業の概要

新聞の投稿記事である「祖母の入院で分かった家族愛」を用いた。

授業の導入で、新聞記事を紹介した。記事の投稿者は「家族の心の穴を少しでもうめられれば」という思いから、その後どのような行動をとったのかについて想像させた。

「マインドペーパー」を活用し、記事の投稿者である美咲さんに思いを馳せて、徐々に「感謝」と「当たり前」という言葉が浮き彫りとなった。

ここで、「家族の行動について、感謝と当たり前を考えよう」と課題設定を行った。当たり前度を数値化することを手立てとしながら、感謝の対象は、広義であることに気付いていった。



新聞活用…本時の導入場面

成果

○新聞記事の投書（中学生の記事、祖母の入院という身近に感じる内容）を扱うことで、家族への思いを自分事に考えるきっかけづくりに繋がった。

その他の授業実践一覧

学年	教科・単元領域名
1 年	国語科「かたかなをかこう」
2 年	国語科「秋がいっぱい」
2 年	国語科「かたかなで書く言葉」
3 年	社会科「事故や事件からまちを守る」
3 年	国語科「組み立てにそって、物語を書こう」
4 年	社会科「わたしたちの新潟県を知ろう」
5 年	国語科「見出しをつけよう」
5 年	道徳科「欲張りって、長所だ」
6 年	道徳科「本当の親切とは」
6 年	社会科「戦争と人々の暮らし」
英語専科	6 年英語「Let's think about our food」
ひまわり 1 組	生活単元学習「秋を見つけよう」
ひまわり 2 組	国語科「あつめてビンゴをしよう」

※第 2 回目の公開授業は 2 月から 3 月に実施予定。

（２）職員終会での新聞紹介

毎週 1 回、職員終会前に B B タイムを行う。職員による新聞記事紹介の時間である。新潟日報の新聞から気になる記事を紹介する。授業に生かせそうなものや職員自身が興味あるものなど多種多様な記事紹介タイムとなっている。

タブレットのロイロノートをつかって、新聞記事を写真で撮影し、一人 2 分程度紹介を行う。

ロイロノートで作成したページを紙ベースに印刷し、職員室印刷機前の壁面スペースに掲示して、B B タイムに参加していない職員も内容を周知した。



（３）NIE スペースの設営

新聞閲覧コーナーを設ける。場所は図書室前とし、児童が興味をもてそうな記事のある新聞を自由に閲覧できるようにする。新聞は定期的に入れ替える。図書委員会が中心となって、毎日、朝の新聞の入れ替え、20 分休みの「気になる新聞記事紹介」の掲示を行っている。

NIE スペース

図書室前に、新聞を掲示するコーナーを設置した。職員が、新聞を開いた状態で掲示することができる台を作成した。通りすがりに子どもがいつでも読めることが、この台の大きなメリットである。また、近くにイスを設置したり、数日分のバックナンバーを置いたりした。



「N I E 掲示」コーナー

新聞を設置する台の脇に、NIE 掲示コーナーがある。毎日 1 記事ずつ掲示することで、毎日 NIE スペースに立ち寄る児童が増えた。



（４）子どもの NIE タイム（朝学習）

朝学習の時間に NIE タイムを設ける。NIE スペースにストックされている新聞記事を児童が持っていく、気になる記事を見付ける活動である。

見付けた後は、気になる新聞記事をロイロノートに写真を撮って貼り、スライドを作成する。そのスライドを貯めて、あとで自分がどんな記事を集めてきたのかを振り返る。

（５）職員研修

臨時休業中に研究推進部で NIE 実践集を基に、新聞活用の授業の在り方を意見交流をした。活発な議論がなされた。

校内における 2 回の N I E 研修を行った。

① 新聞活用の授業の在り方 ご講演 指導者 新潟県 N I E アドバイザー 新潟市立両川小学校 中村 康様	② NIE 授業研究会 5 学年 道徳科 「家族のために」 指導者 新潟県 N I E アドバイザー 新潟市立両川小学校 中村 康様
---	---

新型コロナウイルス禍であるため、新聞館に行くなどの活動が中止となったことが課題である。

4 成果

○職員や保護者の意識改革が見られた。

- ・公開授業に関わらず、授業に取り入れる職員が増えた。（職員室での話題に挙がる）
- ・児童が自主学習に新聞を活用することを課題として取り組むことが増えた。保護者の協力が得られている証拠として捉える。

児童を取り巻く学習環境の一つとして「新聞活用」がアップデートできた。2 年次は、新聞活用が児童の『学びに向かう力』を高めるための手立てとしてどのように有効に働くについて、事実ベースで述べていきたい。（ 駒形 誠 ）